

## 第二十八回大阪河崎リハビリテーション大学認知予備力研究センターセミナー

2022年6月15日(水)10時40分から12時40分、4階小講義室において第28回CRRCセミナーがハイブリッド形式で開催された。河崎病院、水間病院、水間が丘、本学などから大学院生も含め、講義室には24名、遠隔で数名の参加があり、学外講師はZoomでの講演会となった。講演を挿みエーザイ株式会社から情報提供が行われた。

### 特別講演



大阪精神医学研究所新阿武山病院岡村武彦院長より、「精神科臨床におけるスポーツとリカバリー」と題してご講演いただいた。

[要旨] 精神科医療の現場におけるスポーツは、当初は単に症状の改善や体力の回復などが目的であったものが、就労・就学など社会参加促進を含めたりカバリーを目指すようになってきている。リカバリーについては臨床的リカバリー、社会的リカバリー、パーソナル・リカバリーという形で最近では理解されてきている。臨床的リカバリーは幻聴や抑うつ気分などの症状の改善や認知機能の向上、社会的リカバリーは就労、進学や一人暮らしなどの住居状況、仲間づくりなど社会ネットワークなどの機会の増大を意味する。パーソナル・リカバリーは当事者自身が決めた希望する人生の到達を目指すプロセスを指し、複合的な概念であるが、最近の研究で、①つながり (Communication)、②将来への希望と楽観 (Hope and optimism about the future)、③アイデンティティ・自分らしさ (Identity)、④生活の意義・人生の意味

(Meaning in Life)、⑤エンパワメント (Empowerment) をパーソナル・リカバリーの主要な構成要素 (CHIME) として提案されている。スポーツの必要性、意義や価値を理解するために、スポーツ手段論とスポーツ目的論に分けて考えるとわかりやすい。スポーツを社会的に認められている他の価値と結びつけて位置付けるのがスポーツ手段論であり、主観的な体験に価値を認め、社会の中でのスポーツの自立的な存在や独自の文化的価値を認めるのがスポーツ目的論である。臨床的リカバリー、社会的リカバリーは、症状に対する効果やリハビリテーションとしての効果といったスポーツ手段論と関係づけられる。パーソナル・リカバリーは、スポーツを楽しむことで生活の質を高め豊かにするというスポーツ目的論の考え方と重なっており、目的論からリカバリーにおけるスポーツの役割や意義を理解することがより重要である。また、リカバリーにおけるスポーツの役割や意義は、個人的なものだけでなく医療者側や地域におけるものにまで広がることが期待される。

### 次回 CRRC セミナーのお知らせ

第29回CRRCセミナーは、2022年7月20日(水曜日)10:40-12:40に開催予定です。講演者は、関西福祉科学大学保健医療学部作業療法学専攻藤井有里准教授(講演題目未定)、本学理学療法学専攻久保峰鳴助教による「変形性膝関節症患者における歩行時膝関節へのメカニカルストレスの関連要因の検討」、認知予備力研究センター武田雅俊センター長による論文紹介を予定しています。

会場でもネットでも参加できますが、会場にご参集の方はお弁当準備の都合がありますので、事前に本学事務庶務係 <soumu@kawasakigakuen.ac.jp> にお申し込みください。

## 論文紹介

作業療法学専攻堺景子教授より、大うつ病と軽度認知障害における脳体積減少と認知機能障害についての論文を紹介いただいた。

①Cognitive impairment and depression: Meta-analysis of structural magnetic resonance imaging studies. Lenka Zackova, Martin Jani, Yuliya S. Nikolova, Klara Mareckova *NeuroImage: Clinical* 32(2021)102830 <https://doi.org/10.1016/j.nicl.2021.102830>

これまでの縦断的研究では、健康対象群と比較して、大うつ病性患者（MDD）は、軽度認知障害（MCI）のリスクが高いことが明らかにされている。今回、MDD、MCI およびそれぞれに年齢を一致された対象群で脳構造画像研究のメタアナリシスを実施し、MDD と MCI の間で共通の神経要因を同定した。また、疾患特異的な神経要因を同定し、これらの、共通および固有の神経要因が、これらの疾患の併存および疾患特異的症状にどのように関連しているかを調査した。本調査より、MDD および MCI 患者で、島皮質、上側頭回、扁桃核、海馬、視床を含む領域の体積減少が共通していることがわかった。島皮質は社会情緒的処理、感情的経験及び認知機能に関与しており、上側頭回は言語ネットワークの一部であるため、島皮質および上側頭回の体積の減少は、MCI、MDD の両方の危険因子とされるコミュニケーション障害および精神的または社会的活動への参加の減少を反映している可能性があることを示唆している。MCI や MDD 患者における精神的あるいは社会的活動やコミュニケーションの欠落は、感情処理において重要な役割を果たす扁桃核、記憶に不可欠な海馬、皮質下領域と大脳皮質との間の情報を中継する視床を含む皮質下構造の体積減少を反映している可能性がある。

②Digital Intervention for Cognitive Deficits in Major Depression: A Randomized Controlled Trial to Assess Efficacy and Safety in Adults. Richard S. E. Keefe, Elena Canadas, Deborah Farlow, Amit Etkin *American journal of Psychiatry* 2022. 4. 12; [appi.ajp.21020125](https://doi.org/10.1176/appi.ajp.21020125). doi: 10.1176/appi.ajp.21020125

多くの研究で、うつ病患者の記憶、注意、および実行機能のテストにおける神経心理学的パフォーマンスの低下を報告している。これらの認知的課題は、患者の日常生活、特に教育や仕事に深刻な影響を与える可能性がある。大うつ病患者の多くは、症状が抗うつ薬治療に反応したのちでも認知障害を訴えたり、症状寛解期にも認知障害が持続したりする。AKL-T03 は、注意及び関連する注意制御プロセスを改善するために、脳の前頭頭頂葉を活性化させるように作られた治験中のデジタル治療である。2017年10月16日から2018年12月14日までの間に、アメリカ合衆国の4つの施設で、年齢が25～55歳で、DSM-5の基準とMini International Neuropsychiatric Interview(Ver. 7.0.2)（構造化インタビュー）を用いて大うつ病性障害の確定診断を受けた人を対象とした。そのほか、HAM-D 17項目においてスクリーニング段階（28日前）からベースライン（0日）までの期間、14～22点の間であったもの、およびBrief assessment of cognitionの符号コードT-score<50のものとした。2つの介入群間のうつ病症状の変化に統計的に有意な差は認められなかった。大うつ病性障害と診断された患者における認知障害に対する結果は、AKL-T03が、25～55歳の成人の対象群と比較して、持続的注意を有意に改善したことを示した。

## 大学からの研究報告



理学療法学専攻の中村美砂教授より、「主観的口腔機能低下とロコモティブシンドロームの関係」と題してご講演いただいた。

[要旨] 介護予防の必要性は、超高齢社会におけるわが国のみならず、世界中の社会が直面している大きな問題である。2022年4月にフレイル・ロコモティブシンドローム（ロコモ）克服のための医学会宣言が発出された。ロコモは、運動器の障害により移動機能の低下をきたした状態で、進行すると将来介護が必要になるリスクが高くなる状態である。一方で、口腔機能の維持も要介護予防のための重要な因子である。オーラルフレイルの対策も強く推進されている。最近、口腔機能とサルコペニアやフレイルとの関係に関する報告がいくつかなされている。そこで発表者は、地域高齢者における口腔機能とロコモとの関係を明らかにすることを目的に、貝塚市の地域在住高齢者407名（平均年齢73.13歳）を対象に行った。その結果、咀嚼力およびのみこみ機能の低下といった主観的口腔機能の低下とロコモとの間に関係のあることが明らかとなった。この結果は、口腔機能低下と運動器の低下との間に強い関係のあることを示唆する。さらに、これらの口腔機能低下は、ロコモ度1というロコモの早期の段階で起こることが推測された（*Scientific Reports* 2021;11(1):12591.）。

他に地域在住高齢者を対象にロコモの有無に基づく認知機能に対する日常の身体活動量の有効性を明らかにした研究を紹介した。13週間、対象者は週1回の運動教室参加と1日当たりの目標歩数が提示され、可能な範囲で歩くことを推奨された。結果は、ロコモ群において>2.29 Ex(METs・h/day)以上グループでは13週間後、認知機能スコアは有意に高くなった。さらに、2.29Exグループで記憶ドメインのスコアの有意な増加が見られた。以上の結果は、非ロコモ群では認められなかった。以上の結果よりロコモ群において毎日2.29 Ex以上の身体活動が、認知機能を高めることが示唆された（*PeerJ* 2021; e12292.）。

最後に現在進行中の紹介を行った。メタ解析により、高齢者において女性が男性よりも運動によって獲得される認知効果が大きいことが示唆されている。このメカニズムを生理活性物質からの観点から明らかにする研究である。現在、老齢マウスを対象に雄と雌での運動群、非運動群における海馬での遺伝子発現の違いを比較する実験を行っている。